

# 英語リーディングを活性化する高等学校外国語科学習指導に関する研究

— C L I L (内容言語統合型学習) の考え方を取り入れた指導事例の作成を通して —

【研究者】 教科教育部 指導主事 取違 亜希子

【研究指導者】 広島大学 外国語教育研究センター 教授 達川 奎三

## 研究の要約

本研究は、今後求められる資質・能力の方向性を踏まえ、高等学校外国語科における英語リーディング指導の在り方について考察し、授業改善に資することを目的とする。高等学校外国語科では、「読んだ内容に基づいて自分の考えを話したり書いたりする」など、授業において統合的な言語活動を経験した生徒の割合が低いことが指摘されており、発表、討論・議論、交渉等を行う言語活動の一層の充実を図ることが課題となっている。本研究においては、まず、内容理解に終始しがちな英語リーディング指導における現状と課題を明らかにし、内容理解の先に批判的思考や意見交換を伴う学習指導の在り方について考察を行った。次に、そのような学習指導と親和性が高いと考えられるC L I L (Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習) の考え方について、先行研究を基に整理を行った。それらを踏まえた上で、「コミュニケーション英語Ⅱ」の一つの単元を例として、具体的な指導事例の作成を行った。

キーワード：リーディング C L I L (内容言語統合型学習)

## I 研究題目設定の理由

本研究は、高等学校外国語科における、英語リーディングを活性化する学習指導の在り方を明らかにすることを目的とする。

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年、以下「答申」とする。）に示された、今後求められる資質・能力の方向性を踏まえ<sup>(1)</sup>、高等学校のリーディング指導において「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、内容理解に終始する従来型の学習指導からの脱却を図る必要があると考える。具体的には、単元全体を通して「付けたい力」すなわち到達目標から逆算した単元構想を行うことや、複数の技能を統合し、内容理解の先に批判的思考や意見交換を伴う言語活動の一層の充実を図ることなどが不可欠であると考える。

このような、主体的な学びを促し英語リーディングを活性化する授業デザインと親和性が高いといえるのが、ヨーロッパを起源とする「C L I L (内容言語統合型学習)」であり、その原理や教育技法を日

本の外国語科教育において取り入れることは、これからの授業改善に向けた一つの方策になるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、高等学校外国語科「コミュニケーション英語Ⅰ」を例として、C L I L (内容言語統合型学習) の考え方を取り入れた指導事例を作成し、このことを通して英語リーディングを活性化する学習指導の在り方について考察することとした。

## II 研究の基本的な考え方

### 1 高等学校外国語科教育における現状と課題

#### (1) 高校生の英語力及び学習状況について

文部科学省による「英語教育改善のための英語力調査事業（高等学校）報告書」（平成28年、以下「報告書」とする。）では、全国の高校3年生約9万人（国公立約480校）を対象に、英語の4技能の力を測定し、学習状況を検証している<sup>(2)</sup>。「報告書」において明らかになった結果の一部を、次項図1に示す。

- 「話すこと」と「書くこと」に特に課題が大きい。
- 英語を聞いたり読んだりする際に、概要や要点を捉える活動を行ったことがある生徒は半数を上回る。
- 逆に、聞いたり読んだりした後、英語で話し合ったり書いたりして意見交換をした経験は少ない。
- スピーチやプレゼンテーションを行ったことのある生徒は少ない。特に、ディベートやディスカッションといった活動経験は非常に少ない。
- 「話すこと」の試験結果が高い生徒ほど、授業の中で英語を使ってスピーチやプレゼンテーション、ディスカッションをしていた割合が高い。
- 「書くこと」の試験結果が高い生徒ほど、聞いたり読んだりした後に、その内容を英語でまとめたり、自分の感想を英語で書いたりした割合が高い。
- 日本の高校生全体の英語力を CEFR(Common European Framework of Reference：ヨーロッパ言語共通参照枠)に照らすと、「読むこと」と「聞くこと」に関しては、A1上位から A2下位レベル（基礎段階の言語使用者レベル）に集中している。

図 1 高等学校外国語科における課題

こうした結果から、「報告書」では、今後の指導の改善案として、生徒の興味・関心を考慮した時事問題や社会問題等の幅広いテーマを用いて、発表や討論・議論、交渉などの言語活動を豊富に経験させること、また、複数の技能を統合した言語活動の一層の充実を図り、主体的かつ協働的に学ぶことのできる学習指導の改善・充実を図ることが必要であると示され、高等学校外国語科における課題となっている。

## (2) 高等学校学習指導要領改訂の方向性

平成21年改訂の高等学校学習指導要領は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」<sup>1)</sup>ことを目標として掲げ、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能を総合的に育成することをねらいとして、様々な取組を通して充実が図られてきた。

しかしながら、高等学校においては、語彙や文法等の知識がどれだけ身に付いたかという点に依然として重点が置かれ、前述のように、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した「話すこと」

及び「書くこと」の言語活動が適切に行われていないことや、読んだことについて自分の意見を述べ合うなど、複数の技能を統合した言語活動が十分に行われていないことなどが指摘されている。

こうした経緯を踏まえた上で、「答申」では、外国語科において育成を目指す資質・能力について、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三本柱に沿って整理を行い、これらの柱を相互に関連したものと捉えて、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善の取組を活性化することが求められている<sup>3)</sup>。

また、高校生の英語力や学習状況等の課題を改善し、目指す資質・能力を確実に育成するため、科目編成の改訂の方向性として、4技能を総合的に育成する科目である「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」と、「話すこと」「書くこと」を中心とした発信能力を強化する科目である「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を新設することが示された<sup>4)</sup>。

次期学習指導要領で示される目標の達成に向けて、生徒自らが課題を発見し、主体的・協働的に探求し、英語で考えや気持ちを互いに伝え合うことを目的とした学習活動は、今後、高等学校外国語科において一層重要性を増すものと考えられる。

## 2 「英語リーディングを活性化すること」について

### (1) 従来型リーディング指導の問題点

「報告書」に示された通り、授業において英文の概要や要点を捉える活動を行ったことのある生徒は半数を超えるが、概要や要点を捉えた後に英語で話したり書いたりして意見交換をしたことのある生徒は少なく、統合的な言語活動の充実を含めた指導の改善が求められている。

三浦孝(2016)は、現行の高等学校学習指導要領において4技能をバランス良く育成することを目指す「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業について、「テキストの英文の内容を理解させることに全精力を使い果たしてしまっている傾向がある。こうした科目は授業目標を、『テキストの英文内容と文法事項の理解』に置き、その先に行こうとしていない。これは、我々の通常の『読む』行為からすると、まことに不自然である」<sup>2)</sup>と指摘している。

また、和泉伸一(2016)は、従来型のリーディング指導の多くが、「木を見て森を見ず(missing the forest for the trees)」の状態に陥っているのではないかと指摘している<sup>5)</sup>。単語や文構造といった細かい部分

（「木」）にとらわれた構造解析作業や和訳作業をいくら丁寧に行っても、文章の全体像（「森」）を的確に捉えることができるようにならなければ、「読む」行為の本来の目的に照らすと本末転倒だといえる。

こうした問題点を改善し、従来型のリーディング指導からの脱却を図るため、本研究においては、「英語リーディングを活性化する」という視点から考察を行うこととした。

## (2) 「英語リーディングを活性化する」とは

多くの英語教師が、授業づくりに際し共通して抱える悩みは、「授業においてどのような指導をすれば、生徒は教材に興味をもち、正しく理解し、深く思考し、自らの考えを豊かに表現しようとするのだろうか」というものである。田中武夫・田中知聡（2009）は、この問いを「英語教育における学びの本質を捉えたもの」であり、「英語授業をつくる上での教師の願い」でもあると述べている<sup>(6)</sup>。

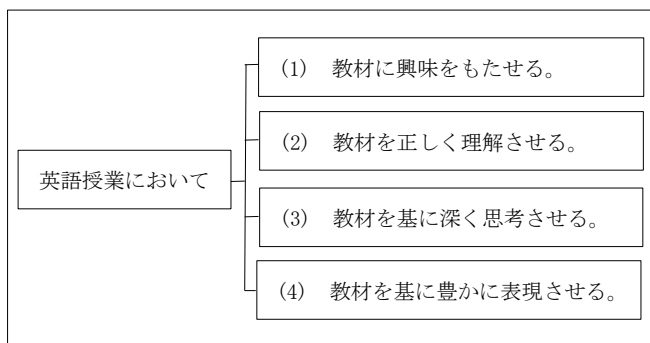


図2 教師の願い<sup>3)</sup>

前述した従来型のリーディング指導は、図2に示した「(2)教材を正しく理解させる」の段階にとどまっており、英文の内容理解が授業における最終的なゴールになっているものと考えられる。

本研究における「英語リーディングを活性化する」とは、授業にペア・ワークやグループ・ワークを多く取り入れて、単に生徒の活動が活性化している状態を意味するのではない。読み取った内容を基に深く思考し、思考したことを英語で豊かに表現し合うこと、すなわち、「思考の活性化」と「表現活動の活性化」が欠かせない要素であると捉えた。目指すのは、内容理解の先に、深い思考と意見交換を伴う主体的・協働的な学びの実現である。

今後求められる資質・能力及び授業改善の方向性を踏まえ、英語リーディングを活性化する学習指導の改善・充実を図るためには、グローバル化社会に対応した学習形態・指導法として注目されるCLIL（内容言語統合型学習）の原理や教育技法のエッ

センスを、日本の外国語科教育に適した形で柔軟に取り入れていくことが一つの方策になると考えた。先行研究を基に、CLIL（内容言語統合型学習）の具体について次に述べる。

## 3 「CLIL（内容言語統合型学習）の考え方」について

### (1) CLIL（内容言語統合型学習）とは

CLIL（内容言語統合型学習）とは、言語教育と教科等の内容教育とを統合し、学習言語を効率的かつ深いレベルで習得することを目的とした、ヨーロッパを起源とする外国語教授法である。21世紀型グローバル社会で求められる汎用的能力を、アクティブ・ラーニングにより育成する教育方法であると考えられている。

### (2) CLIL（内容言語統合型学習）とCBI（内容中心指導法）との共通点とは

渡部良典・池田真・和泉伸一（2011）は、CLIL（内容言語統合型学習）の原理や教育技法について、1980年代にアメリカで体系化されたCBI（Content-based Instruction：内容中心指導法）との共通点から説明すると、その特徴を捉えやすいと述べ、次の5点を挙げている<sup>(7)</sup>。

#### ア 学習内容

教科やテーマなど内容のあるものを学習の中心に据える。英語そのものを学ぶのではなく、英語で何かを学ぶことで、教室という学びの空間における自然な言語使用の機会を生み出す。また、学習者の既存の知識、知的好奇心、認知力に働きかけることで学習への動機付けを高める。

#### イ 学習言語

内容学習のためのツールとして英語を使う。英語を他教科（地理、歴史、生物、化学など）や特定のテーマ（環境問題、異文化理解など）を学ぶための手段と捉え、自然な文脈の中で使いながら身に付ける。

#### ウ 学習活動

オーセンティックな教材を用いた4技能統合型のタスクを行う。様々な媒体による本物の教材（新聞、雑誌、テレビ番組、インターネットのサイトなど）を取り入れ、知識や情報を得るためのリーディングやリスニングを行ったり、その内容に関するディスカッションをしたり、関連事項を調べてレポートを書くといった、4技能を有機的にリンクした学習に重点が置かれる。その過程において、教師による平易な説明や言い換えなど、言語面及び内容面からの

「足場作り (Scaffolding)」も行われる。

## エ 学習成果

学習を通して、教科やテーマに関する知識とスキルが獲得される。その過程において語彙や文法が学習されたり、4技能が訓練されたり、議論の方法、ノートの取り方、レポートの書き方といった学習スキルも習得される。応用、分析、評価、創造など様々なレベルの思考力の高まりも期待できる。

## オ 学習理論

クラッシュェン (Stephen Krashen) のインプット仮説などの理論に基づき、学習者が理解可能なレベルの話し言葉や書き言葉を大量にインプットされることで、脳内の言語習得プロセスが促進されると考えられる。また、教師や仲間とのインタラクティブなコミュニケーション活動を行うことを通して、言語能力の高まりが期待できる。

### (3) CLIL (内容言語統合型学習) の「4つのC」について

前述のように、CLIL (内容言語統合型学習) には、既存の指導法との共通点もあるが、CLIL (内容言語統合型学習) を特徴付ける要ともいえるのが、図3に示す「4つのC」である。CLIL (内容言語統合型学習) では、「内容」と「言語」だけでなく、「思考」、「協学」の4つを計画的に統合し、この枠組みに即して教材を作り、授業案を考え、指導を行う。それぞれの「C」が示す様々な教育原理・技法を統合することで、高品質な授業を実現するというのがその趣旨である。

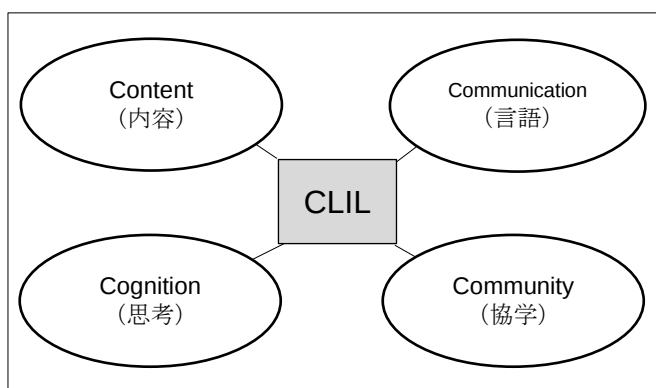


図3 CLILの「4つのC」<sup>4)</sup>

和泉 (2016) は、「4つのC」を統合することについて、「語るべき内容 (Content) があるからこそ、他者に伝える手段としての言葉 (Communication) が必要になる。また、考えるべき内容があるからこそ、思考 (Cognition) が刺激され、広がりや深まりを増してい

く。さらに、他者との交わり (Community) があるからこそ、コミュニケーションが重要になる」<sup>5)</sup>と、その意義を説明している。

次に、渡部・池田・和泉 (2011) を参考に、それぞれの「C」についての具体を挙げる<sup>8)</sup>。

## ア Content (内容)

理科や社会科などの教科内容やトピック (「地球温暖化」や「異文化理解」など) を意味する。単元の中で数回の授業に分けて扱うこともあれば、特定のテーマとして1回で完結することもある。例えば、「イギリス文化」を取り上げるのであれば、風土、民族、歴史、言語、政治、教育などと学年や学期を通して包括的に教えることも可能であるし、「階級制度」だけをスポット的に取り上げることも可能である。

## イ Communication (言語)

言語知識やスキル (4技能) を意味する。CLIL (内容言語統合型学習) では、言語知識 (語彙、文法、発音、談話) の獲得やスキルの訓練といった言語学習に加え、対人コミュニケーションと学習ツールとしての言語使用も重視する。両者は言語学習における車の両輪であり、この両者を有機的に組み合わせることで言語習得が促進される。

## ウ Cognition (思考)

様々なレベルの思考力を意味する。CLIL (内容言語統合型学習) では、知識の理解や暗記を中心とする表面的な学習と、学んだ内容を既存の知識や経験と結び付けたり、批判的に考察を行ったりする深い学習の両者を意図的に仕組み、学習活動を設計する。授業者は、学習者に与える質問やタスクがどの程度の認知的負荷を伴うかを意識して、授業の前半では新出内容の理解やその用語・概念を使ったディスカッション、後半ではグループで問題解決型のプロジェクトを行わせるなど、思考力育成のための様々な教育活動を仕組む。

## エ Community (協学)

「協同学習」や「地球市民意識」を意味する。渡辺・池田・和泉 (2011) は、「席の前後左右の生徒、教室、学校、近隣、市町村、都道府県、国、地域、地球全体さまざまなレベルの community を想定することにより、学習活動と学習内容の両面においてCLILらしさが発揮される」<sup>6)</sup>と述べている。

CLIL (内容言語統合型学習) では、ペア・ワークやグループ・ワークを多用するが、これは教室内のクラスメートと意見を交換し共に学ぶという狭義の community 観に基づくものである。また、「地球

温暖化」や「熱帯雨林の伐採」などといった国際問題や異文化理解をトピックとして扱う際には、広義の community 観に基づき、学習者を「地球市民」の一員と見なす。

(4) CLIL（内容言語統合型学習）の指導方法について

「4つのC」に示されたCLIL（内容言語統合型学習）の考え方を、日本の外国語科教育において実際の授業づくりに落とし込む場合、具体的な指導方法を図4のようにまとめることができる<sup>9)</sup>。

- ①内容と言語の両方を指導する。  
②オーセンティックな素材（新聞、雑誌、ウェブサイトなど）の使用を奨励する。  
③文字だけでなく、音声、数字、視覚（図版や映像）による情報を与える。  
④様々なレベルの思考力（暗記、理解、応用、分析、評価、創造）を活用する。  
⑤タスクを多く与える。  
⑥協同学習（ペアワークやグループワーク）を重視する。  
⑦国際問題や異文化理解の要素を入れる。  
⑧内容と言語の両面での足場（学習の手助け）を用意する。  
⑨4技能をバランス良く統合して行う。  
⑩学習スキルの指導を行う。

図4 CLILの10の指導方法<sup>7)</sup>

CLIL（内容言語統合型学習）には、目的や頻度・回数、比率、使用言語などの違いによって様々なバリエーションがあるが、大きく分けると強形CLILと弱形CLILの二つのタイプがある<sup>10)</sup>。

ヨーロッパで主に行われているのは強形CLILであり、カリキュラムに組み込まれた科目教育として、教科担当教員が、毎授業ほぼ英語のみを使って指導を行う。もう一方の弱形CLILは、英語教育の中で、語学教師が、単発的に英語と母語の両方を用いて指導を行う。

日本の外国語科教育においては弱形CLILが導入しやすいと考えられることから、本研究においては、「検定教科書の各単元のトピックをCLIL的に発展させる」という発想で指導事例を作成することとした。

(5) CLIL（内容言語統合型学習）の考え方を取り入れた授業展開例

これまでに述べてきたことを踏まえ、本研究における、CLIL（内容言語統合型学習）の考え方を取り入れた授業展開例を作成し、図5に示す。Input, Thinking, Outputの3つのステップを軸として、読み取ったトピックに関する情報を分析し、価値判断を加え、論じ合うタスク等を設定することによって、英語リーディングの活性化を図る。

| 授業の流れ |                                           | 学習活動                                                                                                                                                                                                                              |
|-------|-------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導入    | ・オーラル・イントロダクション<br>(★学習内容への興味喚起、学習焦点の明確化) | ・視覚教材（図版や映像）等のオーセンティック素材を基に、トピックの概要を理解する。<br>・授業の目標を理解する。                                                                                                                                                                         |
| 理解    | ・教科書本文の内容理解<br>(★テキストの正確な理解を促す。)          | ・本文を読み、筆者の主張の全体像や各パートのポイントを捉える。<br>（英問英答、スキミング、スキニングなど）【トップダウン活動】<br>・ターゲットとする語彙や文法・語法等に焦点を当てながら、別の角度から本文を読む。【ボトムアップ活動】<br>・表やチャートなどのグラフィックオーガナイザー等を用いて、トピックの内容を整理する。<br>・再話活動やサイト・トランスレーション、要約文の作成などを通して、自分の言葉で本文の内容を語れるようにしておく。 |
| 思考    | ・情報の整理と思考<br>(★テキストの内容について発展的に考えさせる。)     | ・学習内容と実社会及び実生活との接点を見出し、オーセンティック素材（関連する映像、統計、文書等）を基に、異なる視点からさらに深く思考する。<br>・ペアやグループで、分析（分類、比較、関連付け）、評価（価値判断、批評）、創造（考案、制作）などのタスクを行う。<br>・より良い解決策などを共に考える。                                                                            |
| 表現    | ・成果の発表と確認<br>(★トピックについて学んだことを活用し表現させる。)   | ・結果を発表し、互いに比較する。<br>・議論した内容を踏まえ、最終的にスピーチやプレゼンテーション、エッセイ・ライティングなどを行う。<br>・学習全体を通しての振り返りを行う。                                                                                                                                        |

図5 授業展開例

Ⅲ 「コミュニケーション英語Ⅱ」における指導事例の作成と提示

1 指導事例の作成に当たって

本研究では、高等学校外国語科「コミュニケーション英語Ⅱ」の一つの単元を例として取り上げ、CLIL（内容言語統合型学習）の考え方を取り入れた指導事例の作成を行った。本指導事例における「4つのC」を次に示す。

○ 英文テキストの中心的内容（本単元においては「地雷除去の取組」）について、図表やデータを用いて背景知識を活性化し、教科書本文の読解活動を行わせる。

【Content】

○ 単元を通して、読み取った情報や中心テーマに関連するキーワード、新出語句や文法事項等を活用し、本文の内容を自分の言葉で要約したり別の表現で言い換えたりして発話する練習を積み重ねる。

【Communication】

○ 単元を通して、ペアやグループで、読み取った内容について話し合ったり意見の交換をしたりする言語活動を取り入れる。また、発展的課題として、問題のより良い解決策をグループで考え、提案する言語活動を取り入れる。

【Communication / Cognition / Community】

本研究では、これらの「C」を、図5に示した授業展開例に組み込み単元を構想した。また、単元構成例を次の図6のように作成した。

| 第1次                                                                 | 第2次                                                                           |              |              |              | 第3次                                  |          | 後日       |                                    |
|---------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|--------------|--------------|--------------|--------------------------------------|----------|----------|------------------------------------|
| 「地雷のない社会を実現するために、自分たちはどのように関わることができるだろうか？」                          |                                                                               |              |              |              |                                      |          |          |                                    |
| 授業①                                                                 | 授業②                                                                           | 授業③          | 授業④          | 授業⑤          | 授業⑥                                  | 授業⑦      | 後日       | 後日                                 |
| 本文全体の<br>通し読み                                                       | 本文<br>Part 1                                                                  | 本文<br>Part 2 | 本文<br>Part 3 | 本文<br>Part 4 | まとめ                                  | 発展<br>課題 | 定期<br>考査 | パフォー<br>マ<br>ン<br>ス<br>テ<br>ス<br>ト |
| スキ<br>ミ<br>ン<br>グ<br>ス<br>キ<br>ャ<br>ニ<br>ン<br>グ<br>英<br>問<br>英<br>答 | 読解活動、文法・語法<br>再話活動<br>サイト・トランスレーション<br>ロール・プレイ<br>ミニ・ディスカッション<br>エッセイ・ライティング等 |              |              |              | ディスカッション<br>プレゼンテーション<br>エッセイ・ライティング |          | 活用問題等    | プレゼン<br>テー<br>ション等                 |

図6 単元構成例

2 指導事例の提示

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |                                         |                                            |                                                                                    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|--------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>1 単元名</b> Lesson 8 Working against the Clock<br>CROWN English Communication II New Edition（三省堂）                                                                                                                                                                                                      |                                         |                                            |                                                                                    |
| <b>2 単元の目標</b><br>○ペアやグループで、互いに協力しながら積極的に質問したり意見を交換したりする。<br>（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）<br>○英文や図表から読み取ったことを基に、情報や自分の考えを簡潔に話す。<br>（外国語表現の能力）<br>○英文を読んで、特に重要な事実等を捉えることを通じ、全体の要旨を把握する。<br>（外国語理解の能力）<br>○完了の分詞構文（having+過去分詞）、受け身の進行形（be being+過去分詞）、S is C（C=whether 節）を用いた文の構造と意味を理解する。<br>（言語や文化についての知識・理解） |                                         |                                            |                                                                                    |
| <b>3 単元の評価規準</b>                                                                                                                                                                                                                                                                                        |                                         |                                            |                                                                                    |
| コミュニケーションへの<br>関心・意欲・態度                                                                                                                                                                                                                                                                                 | 外国語表現の能力                                | 外国語理解の能力                                   | 言語や文化についての<br>知識・理解                                                                |
| ペアやグループで、互いに協力しながら積極的に質問したり意見を交換したりしている。                                                                                                                                                                                                                                                                | 英文や図表から読み取ったことを基に、情報や自分の考えを簡潔に話すことができる。 | 英文を読んで、特に重要な事実等を捉えることを通じ、全体の要旨を把握することができる。 | 完了の分詞構文（having+過去分詞）、受け身の進行形（be being+過去分詞）、S is C（C=whether 節）を用いた文の構造と意味を理解している。 |

#### 4 単元の概要と指導のポイント

本単元では、「アフガニスタンにおける、日本人科学者たちによる地雷探査ロボット開発の取組」について書かれた英文を教材として扱う。高等学校学習指導要領外国語「コミュニケーション英語Ⅱ」の「2 内容（1）」の「ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめる。」を基に設定した単元である。

##### 第1次

対人地雷は、世界各地で紛争が起きる度に大量に埋設されてきた歴史的経緯がある。その多くは半永久的に爆発力を保ち、今もなお数多くの被害者を生み出している。アフガニスタンは、世界の中でも地雷汚染の激しい地域の一つである。除去作業は依然としてほぼ手作業で行われており、探知した地雷を細心の注意を払って掘り出すという危険な作業が繰り返されている。日本をはじめ、対人地雷全面禁止条約（オタワ条約）の加盟国は、「地雷のない世界の実現」を2025年までの目標として掲げているが、その実現のためには、様々な側面から国際社会の取組を一層加速させる必要がある。オーラル・イントロダクションや本文の全体像を捉えさせることを通じて、地雷の問題点や単元を通して追究すべき課題に気付かせたい。

##### 第2次

本文で取り上げる東京工業大学名誉教授の広瀬茂男氏は、ヘビ型ロボットや四足歩行ロボットなど、これまでに数多くの独創的なロボットを開発してきた世界的権威である。彼を中心としたグループが開発したロボットが、地雷探査・除去の取組において着実に成果を上げる一方で、コスト面や故障時の修理の難しさ、またロボットの導入によって雇用が失われることを恐れるアフガニスタンの人々との軋轢など、様々な課題も浮き彫りになっている。こうした課題を解決し、人々が安心して暮らせる「地雷のない世界」を実現するためにはどうしたらよいか、また自分たちはどのように関わることができるか、筆者の言葉である“*There is no time to lose. We are working against the clock.*”の含意も踏まえて意見交換する言語活動を仕組む。

##### 第3次

第3次においては、本文とは異なる視点からのデータを投げ入れることにより、生徒にさらに深い思考を促す。近年、地雷被害者数が急増していることを示すデータや資料を基に、問題の原因とその解決策として何が考えられるか、優先順位が最も高いと考えられる取組とその理由をグループで協議し、全体で比較させる言語活動を仕組む。また、後日行うパフォーマンステストとして、地雷探査ロボット購入のための支援をインターネット上で呼びかけるプレゼンテーションを設定する。

#### 5 単元の指導計画（全7時間）

|              | 学習活動                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | 指導上の留意点                                                                                                                                                                                                                          |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1次<br>(1時間) | <ul style="list-style-type: none"><li>・オーラル・イントロダクションを通して、「世界の地雷問題の現状と課題」について知り、背景知識を活性化する。</li><li>・英文全体を速読し、概要や要点を捉える。</li><li>・本単元の目標を理解する。</li></ul>                                                                                                                                                                         | <ul style="list-style-type: none"><li>・文字だけでなく、音声、数字、視覚（図版や映像）による情報を与える。</li><li>・地雷が埋設されている国々は決して少なくないことを視覚的に捉えさせる。</li><li>・「地雷のない社会を実現するために、自分たちはどのように関わることができるだろうか」という問いを追求する単元とする。</li></ul>                                |
| 第2次<br>(4時間) | <ul style="list-style-type: none"><li>・各パートの読解を行い、筆者の主張の概要や要点を正確に捉える。</li><li>・各パートの内容を、自分の言葉で要約したり、別の表現で言い換えたりする再話活動を行う。</li><li>・パート毎に設定された問いについて、ロールプレイやミニ・ディスカッションを行う。<br/>(例：「<i>Gryphon V</i>」がアフガニスタンの人々に受け入れられるようにするためには、どのような方策が考えられるだろうか)</li><li>・自分の考えを簡潔なエッセイにまとめる。</li></ul>                                       | <ul style="list-style-type: none"><li>・各パートの概要や要点はグラフィックオーガナイザーなどに整理し、英文の内容を構造化させる。</li><li>・単元末の発展課題に向けて、本文の内容を自分の言葉で語れるように、ペアやグループで行うタスクを仕組む。</li><li>・各パートの内容に関連した、グラフや図表、新聞記事などのオーセンティック素材を活用して、背景知識を十分にインプットしておく。</li></ul> |
| 第3次<br>(2時間) | <ul style="list-style-type: none"><li>・異なる角度から再度本文を読む。</li><li>・グラフや図表などの資料を基に、2013年まで減少を続けた地雷被害者数が、2014年以降急増している原因について考える。</li><li>・アフガニスタンの子供たちが安心して遊び学べる社会にするためには、国、NGO、個人など様々なレベルからどのような取組が考えられるか意見を出し合う。</li><li>・最も優先順位が高いと考えられる取組とその理由をグループで考え、発表し、クラス全体で比較する。</li><li>・自分の考えを簡潔なエッセイにまとめる。</li><li>・単元全体を振り返る。</li></ul> | <ul style="list-style-type: none"><li>・地雷問題の解決に向けては、「地雷の除去」だけでなく、「回避教育」「被害者援助」「地雷の破壊」などの取組や、「地雷保有大国」と呼ばれる国々の協力が不可欠であることなどにも気付かせる。</li><li>・単元全体を通して思考したことや表現したことを、最終的に行うパフォーマンステストに生かすことができるようにする。</li></ul>                     |

## Ⅳ 研究の成果と課題

### 1 研究の成果

本研究では、今後求められる資質・能力や授業改善の方向性を踏まえ、高等学校外国語科における英語リーディングを活性化する指導の在り方について考察を行い、次のような成果があった。

- 一つの単元を例に取り、CLIL（内容言語統合型学習）の考え方を取り入れた「コミュニケーション英語Ⅱ」の指導事例を示すことができたこと。

### 2 今後の課題

今後の課題として、次の点が挙げられる。

- CLIL（内容言語統合型学習）の考え方を取り入れた4技能統合型の授業における、生徒の学習到達度やパフォーマンスを多角的に評価するためのルーブリックやポートフォリオ等の活用について、さらに研究を進めること。

### 【注】

- (1) 中央教育審議会(平成28年)：『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）』 p. 193  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf)
- (2) 文部科学省(平成28年)：『平成27年度 英語教育改善のための英語力調査事業（高等学校）報告書』 pp. 17-50
- (3) 中央教育審議会(平成28年)：前掲書 pp. 193-205
- (4) 中央教育審議会(平成28年)：前掲書 p. 199
- (5) 和泉伸一(2016)：『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』アルク pp. 175-180に詳しい。
- (6) 田中武夫・田中知聡(2009)：『英語教師のための発問テクニック 英語授業を活性化するリーディング指導』大修館書店 pp. 4-6を参照されたい。
- (7) 渡部良典・池田真・和泉伸一(2011)：『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』上智大学出版 pp. 2-3
- (8) 渡部良典・池田真・和泉伸一(2011)：前掲書 pp. 4-9に詳しい。
- (9) 池田真(2011)：『CLILの原理と指導法』『英語教育』Vol. 62 No. 3 大修館書店 pp. 12-14
- (10) 渡部良典・池田真・和泉伸一(2011)：前掲書 pp. 9-11に詳しい。

### 【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成21年)：『高等学校学習指導要領』 p. 110
- 2) 三浦孝(2016)：『高校英語授業を知的にしたい 内容理解・表面的会話中心の授業を超えて』研究社 p. 3
- 3) 田中武夫・田中知聡(2009)：『英語教師のための発問テクニック 英語授業を活性化するリーディング指導』大修館書店 p. 6

- 4) 渡部良典・池田真・和泉伸一(2011)：『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』上智大学出版 p. 5
- 5) 和泉伸一(2016)：『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』アルク p. 76
- 6) 渡部良典・池田真・和泉伸一(2011)：『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』上智大学出版 p. 8
- 7) 池田真(2011)：『CLILの原理と指導法』『英語教育』Vol. 62 No. 3 大修館書店 p. 13

### 【参考文献】

- 笹島茂(2011)：『CLIL 新しい発想の授業 ー理科や歴史を英語で教える!?-』三修社
- 上山晋平(2016)：『英語教師のためのアクティブ・ラーニングガイドブック』明治図書
- 池田真(2011)：『CLILと英文法指導 内容学習と言語学習の統合』『英語教育』Vol. 60 No. 7 大修館書店 pp. 34-36